

# アルチュセール 素人の読み方

平井 玄

平井玄といいます。多少の自己紹介というか、自己限定が必要かと思ひ、そこから話をしてみたいと思います。私はいうまでもなくフランス思想の専門的な研究者でも、大学に職を得ている人間でもありません。たまたま1968年に高校に入りまして、その場所が東京の新宿という街だったということで、当時の世界を変革しようとする運動と、街の風俗とか文化行動といひますか、そういうところで今日話に出ているAIE（国家のイデオロギー装置）というものを考えざるを得なかったという意味で、ここに呼ばれたのかなと思ひています。

タイトルに「アルチュセール 素人の読み方」と付けました。これはもちろん林淑美さんが中野重治について大変重要な研究をされていることを知った上でのひとつのエールでして、「レーニン 素人の読み方」というエッセイが中野重治の著作のなかにあります。本当のところは「ど素人の読み方」とすべきで、そういう人間がどういふふうに読めるかということで聞いていただければと思ひます。

## 1. 五月革命と新宿文化

今回訳されたアルチュセールの『再生産について』という本については、崎山政毅さんが言われたように何度か訳されてきたものを目にしてきたわけですが、読んだ当初から「デジャヴー」のような感覚を与えられました。なぜかといひますと、先ほど言ひました1968年の4月に、僕は高校に入るわけですが、学生の運動なり社会的な変革運動が、大文字の政治・労働・経済の場、つまり「首相訪米阻止」「～法反対」といふような抽象的な政治空間、あるいは工場とか、生産点とか、そういう場所で闘われるというよりも、大学さえ超えた、当時前衛文化の中心であった新宿の街頭で闘われるのを目のあたりにしたわけですが。学校の中では、「何項目要求」といふ文章を作る時に非常に苦労した思ひ出があります。というのも、「補習授業を廃止しろ」とか、「制服を廃止しろ」などというスローガンは実に陳腐なもので、こんなものはどうでもいひと思ひながら、われわれは要求していた。むしろ「学校を街頭化せよ」、街頭で起こっている面白いこと、つまり文化反乱を学校でやろうといふような雰囲気になつたわけですが。そういう体験をしてきたものにとっては、支配形式の文化的な再生産を批判的に対象化したアルチュセールの断片的なテキストが日本で訳され、論じられている論脈といふのは、これはどこかで読んだことがある、自分たちがやったり考へてきたことじゃないか、という風に感じられる。もちろんそれを正確に読めていたかは別の問題なわけですが。

そういう意味で今回訳された完全に近い草稿群を読んで、まさに68年5月のフランスの激動の渦中でこのことが考へられていたんだといふことは、納得のいくことでした。アルチュセールがフランス共産党の中に身を置きながら、あえて「国家権力」といふ言葉を発したときには、

当然ソ連や中国に既に成立しているとされた「労働者国家」をも指していたと思いますが、それをことさらのように価値中立的に対象化して暴力的な抑圧装置とイデオロギー諸装置というかたちで分節化していくという文脈は、68年の体験がなければ、まず出現しなかったであろうと思いました。そこでアルチュセールが挙げているのが、「探求のためのノート」にある宗教/教会・公的私的な学校・家族・法・政治/政党・組合・情報/メディア・文化/スポーツというような諸制度だったわけです。そういう領域で行われている言説生産-イデオロギーの生産が、全体として支配階級の「音楽」として鳴りわたる。もちろんこれはヨーロッパ音楽の伝統を踏まえて言っている。バッハのソナタやベートーベンの対位法だけでなくワーグナーの不協和音、そしてシェーンベルクの12音音楽まで、単純に一つの主題にまとめられていくというだけではないような、多声性を含んだそれが支配階級の音楽を奏でている、とアルチュセールは述べているわけです。その音楽のハーモニーに錯乱的なノイズを打ち込むことが、五月革命の無意識、つまり掲げられた政治的スローガン、あるいは諸政治組織の意識的な運動を超えた五月革命の集団的な欲望だったのではないか。それに対するアルチュセールおよびその周辺の人たちによる交渉の結果がこういう形で結実したのだと思います。

同時に、アルチュセールも知らないうちに「主体への呼びかけ」とそれへの応答という主体形成装置の「合わせ鏡」に向けて石を投げたり、棒で叩き割ることが頻繁に行なわれた。当時の五月革命および全世界の若い世代の運動のなかで、バリケードを築いて投石するのは主要な戦術です。60年代の後半に街頭で投石するということは、パリ・コミューンの時代から100年経っていますから軍事的にはほとんど無意味な行為だったわけです。すでに日本の機動隊はジュラルミンの盾で武装していましたし、ヨーロッパの機動隊もまた、より軽いプラスチックの丸い盾で武装していて、その手の技術開発というのはこの時代きわめて急速に進んだ。例えば韓国でも70年代の学生運動に対する機動隊の姿から今の機動隊の姿までを連続写真のように見ると、どうやって発達していったのかがよくわかります。もちろん、その後ろでは正規軍の戦闘ジェットヘリや携帯ミサイルが開発されている。それなのに街頭ではまるで古代ローマのスパルタクス反乱のような様相を呈していたんですね。棒と石で、近代国家が作った暴力装置に対抗する。アナクロニズム以外の何ものでもない。しかしながら、石は機動隊に向けてだけ投げつけられたわけではないだろう。たいした破壊力はないし、まるで届かないわけですから。つまりアルチュセール自身がそこまで読んでいたかどうかは別にして、大学や繁華街という「主体」が呼びかけ合う「合わせ鏡」に石を投げて叩き割るということだったのではと思います。当時世界各地の騒動のなかで、デパートのショー・ウィンドウが叩き割られるということが行なわれたわけです。「歴史哲学テーゼ」でベンヤミンが、7月革命のさなかに時計台が射撃された事件を、象徴的に歴史の連続を断ち切る行為として描いていますけれど、それに近い。目抜き通りの百貨店のショー・ウィンドウや大学の窓ガラスを叩き割るという行動は、そういう資本主義の主体形成装置を叩き壊すという身振りの、一番分かりやすい形だったのではないかと思います。

## 2. 上部構造への侵入

おそらくそうした行為というのは、僕らが意識していたかは別として「上部構造への侵入」だったのだと思います。つまり、それまでのマルクス主義的なあるいは左翼的な社会変革のあり方というのは、生産至上主義であり労働至上主義に呪縛されていた。例えば工場で、あるいは農民たちの労働現場で、具体的なモノが作られている地点から世界を変革する動きが始まるし、ただだからこそ歴史的な力を持つという発想が強かったわけです。ところが僕らが参加していった運動というのは、むしろ消費の地点で、「消費点」と僕はあるとき冗談で呼んでいましたけれど、生産点でなく消費点でその消費を批判する、いささか子どもっぽくそんな行為をやっていたのではないかなと思います。人は消費によって主体形成されようとしていたからです。おそらくそれは、「上部構造への侵入」だったと思います。

これは、従来のマルクス主義的な視点では、およそ邪道といえますか、変革運動の名に値しない未熟な行き過ぎであり、古臭いブランキズムであるというふうに考えられたと思います。そうした見方は、当時の若い世代の運動に対する公認の共産党員たちの対応に現われていた。一方、行為者たちの方でも、その豊かな象徴性を忘却して、物理的な暴力性そのものに囚われてしまう。

しかしながら、そういう中で、いわばくっきりとそうした行為の二重性を理論化するために今回訳された『再生産について』の議論が書かれたようにさえ読めるわけです。もちろん、学生たちの反乱を理解するためにアルチュセールの周囲にいた人たちは別に「学校装置」というものを考えていたとバリバルは言っていますし、あるいはブルデューやフーコーの議論ともかみ合っていたと思います。しかしその後70年代以降、私たちが生きる世界で起こっていったことは、68年のそういうアナーキーな二重性の豊かさをどうやって無化するか、どうやって吸収するか、どうやって資本主義的な装置の中に引きずり込んで方向を変えていくか、ということだったのではないかと思います。

政治的にはそれはいわば「フォーディズムの妥協」といわれるような、日本で言えば革新自治体が大量に生まれた70年代、ヨーロッパにおいても社会民主主義的な政権が各地で誕生すると、68年世代はそのなかに多くの人たちが吸収されていく。それについてはもちろんプラスもマイナスもあると思いますけど、70年代以降20年くらいにわたって「フォーディズム的妥協」の体制が先進諸国の中で成立したと思います。しかし1989年以降、つまりベルリンの壁崩壊、ソ連の崩壊以降、いわばその「妥協」の必要がなくなる時代がやってきたわけですね。もはや物理的な対抗勢力が力を失った以上、そういう妥協はする必要はない。むしろ剥き出しの市場主義、資本主義で行こうと。そのときに「68年的なもの」というのは、どういうふうに思想的に吸収されたのか。われわれが上部構造つまり文化領域に進駐していった侵攻していった時にそれを支えた心情というのは、68年世代特有の個人主義といえますか、ある種の急進リベラリズムのようなものがあるんですね。プロトアナキズムというか、要するに「やりたいことをやるだけさ」という論理ですね。当時そういうタイトルのノンセクト学生たちによる本が出ています。こういう心情的な傾向、いわば心意気みみたいなものによって、多くの者たちが公式的なマルクス主義や共産党イデオロギーの圧力に対抗していったという面が確かにあったわけです。

トロツキズムや毛沢東主義やローザ主義と呼ばれるもの以前に、多くの学生運動大衆を支えていた空気はプロトアナキズムみたいなものだったと思います。それをどうやって吸収していったか。1990年代に生じたのは、私たちが進駐していった文化諸装置の全体を市場化していくということだったのではないか。AIEは市場化されたというのが、90年代にいたって私たちが眼前に見た光景だったと思います。ここで68年的なアナキーが資本主義のアナキー、つまりグローバリズムに接続されてしまう瞬間が訪れる。村上龍のような作家の行跡がその回収の場面を無惨なまでに記録している。

### 3. 広告産業化したイデオロギー諸装置

もう少し具体的に言いますと、今やあらゆる産業が広告産業、マーケティング産業と化していると言っているんじゃないかと思えます。例えば、現代の基幹的な産業生産物と考えられている自動車ですね。自動車にしてもまず消費されるライフスタイルが構想されて、それに沿ってイメージ、デザイン、テクノロジーや素材が開発され、生産体制も整えられていくということは明らかなのではないかと思います。巨大企業の多くは、大規模なマーケティング部門を自社内に持っている。そしてこれは専門的な研究を待たなければならないわけですが、例えば80年代、あるいは1920年代30年代と比べると、飛躍的にその比重は増しているのではないかなと思います。まだ例えばトヨタのような企業で技術部門からCEOが輩出されることはあっても、広告部門からということは、日本ではないわけです。しかしアメリカやヨーロッパの企業ではそろそろそういう事態が出現すると思えます。最高責任者になっていなくても、発言の比重が大きくなっていることは事実で、まず欲望を創出し、そこから市場を創出して、その上で生産体制が考えられていくという事態が、中小企業から巨大企業にいたるまで、かなり普遍的な事態になっていると思えます。

全ての企業がそうした広告部門、マーケティング部門を持っているというわけではもちろんない。当然ながら広告代理店、マーケティング産業が大きくなっている。それが現代の政治の世界にまで入り込んでいるということは、この間のブッシュ、ブレア、小泉といった政治家たちの政治パフォーマンスを見てみれば明白なことです。フランスとアメリカの広告産業が合体したグローバルなマーケティング企業が彼らのイメージ戦略を担っているということは、『ル・モンド・ディプロマティーク』でも伝えられて明らかになりつつある。彼らの「ワンフレーズ・ポリティクス」といったものやファッション・スタイル、ブレアのファッション・スタイルが「クール・ブリタニア」と呼ばれたように、明らかにビートルズ世代のスーツの着こなしから言葉遣いや立ち居振る舞いまでが、そこでトレースされている。なぜ小泉純一郎はその白髪の長髪を切らないのか、彼がプレスリーなどという人物になぜあれほどのオマージュを捧げるのかといったことは、広告代理店の介在なくしては考えられないだろうと思えます。実のところプレスリーは、50年代のアメリカ南部であまりに黒人たちに近すぎた「危険人物」だったのですが。

アルチュセールが生きていた時代、この書物を書いた時代には考えられなかったような、国家のイデオロギー諸装置そのものが市場化され産業化されていくという事態になってきている。

宗教については、例えばアメリカのテレビを使った布教活動から元は建設産業の経営者だったビン・ラディンによるアルカイダまで、学校については、これは立命館大学を見れば分かると思います(笑)。家族のあり方でさえ、構成主義的な理解以前に、いかようにも商品向けのライフスタイルやイメージに沿って読み替えられる。法までもアメリカのネオ・リベラリズム的な政策によって一方的に改変されていく。そこには正体不明の「マーケットの要求」があるだけで、法理論的な議論など全くない。組合もまた、第三セクター的な企業体と化さなければ生き残っていけないといわれているわけです。

#### 4. AIEをめぐる攻防

そう考えると、アルチュセールの理解では「情報・文化」と一番最後に挙げられていたものが極端に肥大化して、むしろ今まで挙げた諸装置というのはすべて広告マーケティング産業化しているといってもいいのではないかと思います。そういう中で私たちは暮らしている。90年代以降その過程はドラスティックな形で進んでいる。ちなみに、昨今「消費者としての労働者」の抵抗を資本は阻止できないだろうと考える素朴な思想家も日本では現れています。これは、私のように消費者の無意識を操作する資本の変容を眼前に見て、消費者の抵抗自体から市場を創出していく過程を30年くらい見てきたものにとっては、驚くべき発言であると思わざるをえない。イタリアでは20年代の生活協同組合運動から70年代のアウトノミアまで、労働組合や生産点を超えて消費者としての労働者を組織していく、生活そのものを組織していくという動きがあった。それから70年代のアメリカで始まったラルフ・ネーダーの消費者運動、これは世界中に大きな影響を及ぼして、例えば晩年のエドワード・サイードはネーダーを高く評価していたという事実もありますし、ひとつの対抗社会運動だったわけですね。この国でも似たような試みは続けられている。そして、そうした抵抗から新たな市場を創り出していくために広告産業が発展していく。そういったことの成功と失敗の道を省みないで、今こういうことをストレートに言えるというのは、実にすばらしい素朴さといわざるをえない。もちろん問題はそこからずっと先にあります。

つまり広告社会化に対する対抗的な運動はあったわけで、アンリ・ルフェーブルの日常生活批判やギィ・ドゥボールのスペクタクル社会批判、それからジャン・リュック・ゴダールの映画における黒画面やニューズリールの運動ですね。それらは上部構造に彼らが侵攻していくことの実践であり理論的な根拠付けであった。さらにそれを受けて日本の津村喬さんの、これは中国の文化大革命を現代思想の文脈から解釈したとっていい文化＝革命論、そこから70年代の広告産業批判に向かっていくという動きがあったと思います。

そういった動きを踏まえつつ、足立正生さんによる映画＝報道論、映画＝運動論が現れてくる。その実践的な発展として足立さんたちがパレスチナの地に向かい、そこで撮られた映画『赤軍PFLP 世界戦争宣言』という映画がありました。その中で掲げられていたのが、「プロバガンダの最高形態は武装闘争である」という言葉だったわけです。まさにこの言葉が60年代から70年代にかけての世界的な上部構造への侵入の、最も鋭角的な経験のひとつの帰結だったと思います。武装闘争を行なうことが国家のイデオロギー諸装置への侵入の最高の形である、と

いう結論にとりあえず彼らは到達したんだろうと思います。私はそれを読んだ同時代にも、それだけでいいんだろうかと思いました。それで自分たちの行為が孕んでいた豊かな二重性を発展させられるのか、と。したがってまた別の道を歩む。しかしこの言葉はこうしたAIEをめぐる攻防の流れのなかで現れてくる言葉であって、いわゆる第三世界論的な暴力主義の文脈からだけで足立正生さんや、あるいはブラックパンサー党はじめ世界的なレベルでの様々な武装闘争の動きを見るべきではない。そういうイデオロギー諸装置への進駐という視点からも考えられるのではないかと思います。しかしそれは、多くの場合忘却されていきました。

## 5. プロパガンダの最高形態は金儲けである

その果てに、20世紀の終わりに現れた資本主義による対抗戦略とは何だったのかというのは、一言で言えると思います。「プロパガンダの最高形態は金儲けである」と。

例えば、極めて具体的に言います。私には17歳（2006年現在）の娘がいるんです。彼女は大学入試を控えて小論文の学習なるものをしているわけですが、そこで読んでいる資料というのはなんと森巢博の本でした。テッサ・モーリス＝スズキさんの旦那さんですけども、かのオーストラリアのギャンプラーですね。その自叙伝的なエッセーの中で躍動しているのは明らかに68年世代のプロトアナキズムです。親の体験はこうやって受け継がれる。しかし同時に彼女は、ホリエモンに対するシンパシーも濃厚に持っているんですね。そこでホリエモンの逮捕劇をめぐる父親と激しく言い争うということになるわけです。逮捕されたということは彼女にとってとても大きいことで、つまり裏ヒーローになったんです。もはや公然たるヒーローではなくて、ネット社会で密かに語られる裏世界の人物になったことで、そのカリスマ性はむしろ膨張する。森巢博とホリエモンは何ら違わない、彼女にとって両者ともヒーローになっている。これは面白いことでして、森巢さん自身も「とりあえずホリエモンでもいいじゃないか」と言った。つまり68年世代のプロトアナキズムはああいうウルトラ個人主義的な発想に実に弱い。これこそがもっとも駄目なところだと思います。娘とのイデオロギー闘争をこれからも続けざるを得ない。

しかし、「プロパガンダの最高形態は金儲けである」という言葉は、今の若い世代みなさんのものですね。あるいはこの大学に入って来れない人間たちにとってこそ、ものすごくリアリティのある言葉で、そこから這い上がるにはとにかく株でも、極端に言えば犯罪すれすれのことには手を染めてもいいから、金儲けによって這い上がるしかない。それ以外で上昇する方法なんてこの社会にあるのか、というのが説得力のある言葉として流通していると思います。実際に公的なイデオロギーとは別に、現在の支配層はそれを煽っているわけです。煽りすぎると引き締める、引き締めながら煽るということのことを繰り返す。それは林さんがさきほど分析された、中野重治が言った娘売り行為についての煽りつつ批判する、批判しつつ煽るみたいな道徳主義的言説に近い。同じことがやはり行なわれていると思います。

足立さんたちの「プロパガンダの最高形態は武装闘争である」というテーゼにひとつの極端な帰結が示されるようなわれわれの世代の運動というのは、単に武力によって後退した、あるいはコマーシャルイズムの画策によって敗北しただけではない。むしろ一人ひとりを国家のイデ

オロギー諸装置にするような、一人ひとりをAIEにするような資本主義の変容によって無力化されていったんだと捉えるべきだろうと思います。その一人ひとりをイデオロギー諸装置にするとは一体どういうことか。例えばアフィリエイトという、これは若い世代の方のほうがご存知だと思います。ネット上で自分のブログを作って、そこに本でもいいし、化粧品でもいいし文房具でも何でもいいですが、自分が気に入ったものについてのコメントを書いて、それをアフィリエイト専門のプロバイダー会社に登録する。自分が書いた推薦文、これを使ったらこんなに気持ちよかった、これは美味かった、この店はよかった、というようなちょっとした感想や体験談ですね、自分のブログを訪れた人がそのバナー広告をクリックして、アフィリエイト会社と契約したメーカーなり企業なりの商品を購入すると、ポイントが溜まっていくというシステムがあるわけです。昔で言えば内職に近い月何千円とかの主婦のアルバイトとして広がっています。そういう形で一人ひとりが広告代理店化しているわけですね。商品の流通販売を媒介することが自己主張になっている。企業としては、無理やり押し付けて売っているわけではない、消費者自身の欲望がこの商品を買わせているという、下からの欲望を喚起するというところに非常に熱心になっている。一人ひとりがネット空間の隠された消費の欲望に呼びかけ、そして名も知らぬ消費主体が応答する。

## 6. リアルでヴァーチャルな抵抗

ではそこで今、どんな抵抗が可能なかわれわれは考えなければならない。先ほどから言っているように、僕らにとってストリートというのは「消費」に抵抗する無意識の生産の場だったんですね。つまりAIEに対抗する戦場だったわけです。ところがそのストリートもまた広告代理店によって占拠されていることは明白だと思います。今年(2006年)の4月の終わり29日から5月1日にかけて渋谷で何が起こったのかという話をしたいと思います。4月29日に、「反天皇制運動連絡会」という友人たちがやっている天皇制を問題にし続けているグループが集会を開きました。場所は渋谷の公園通り、PARCOの前にある区民会館だった。ところが、当日その周辺は機動隊の楯によって固められているんじゃなくて、奇妙な真空の空間が作られているんですね。会場の周辺がぼっかりと空いた人の入りにくい空間にされて、その周囲の道路上に機動隊の車両による阻止線が作られ右翼がそこから先に行けないようにする。その周りには右翼のサーキットと化すわけです。鳴り物入り旗指物の右翼の街宣車が何十台もぐるぐる回って、個人の名前を叫びながら「お前ら殺してやる」「お前ら朝鮮人だ」と言って口汚く攻撃する。しかし同時に、連休の最初の日曜日の渋谷ですから、おそらく数十万人規模の群集がその周りのビルや店や道路上で普通に消費行動を行っているわけです。そこには何の違和感もない。

こんなことがどうして可能なのか。いわば、ニュルンベルクのナチ党大会が巨大な消費空間の真ん中で行われているのに近いものがある。ここで僕が考えたいのは、CRMという10年位前にアメリカで始められた広告戦略のあり方、カスタマー・リレーション・マネジメントという手法のことです。これは広告業界では別の訳し方をしているようですが、〈消費者動線誘導〉と考えたほうがいい。具体的に言うとも携帯の画面とかネットの画面から、テレビ映像、電車の車内や車体、さらにはビルの外壁やスタジアムのような巨大空間にいたるまでの場所を、一定

の文脈を秘めたひとつながりの広告空間に構成していくことです。大阪や京都もそうだと思いますがターミナル駅に行きますと、その柱だとか通路、壁から天井にいたるまで広告空間と化しているわけです。広告が一連のストーリー、脈絡を持ったストーリーとして演出されるということが行われていて、そこから携帯の企業サイトに直接飛ぶとか、楽天とかネットモールに飛ぶわけです。そこで映画のようなストーリーを見せられて、そこに出てくる商品をクリックすると購入できる。歩きながら携帯やブック型コンピューターを見て、街中でそういう消費行動が行われている。そういう迷路が無数に設定されている。つまりかつてベンヤミンが言ったパッサージュというものが、現実の街路とヴァーチャルな街路に二重化されて、目の前にある渋谷の街がネットにある仮想モールのほうに繋がっている。ですから、目の前の右翼の街宣車はネット画面のなかの格闘ゲームに出てくるアイコンのように見えるし、その真ん中で集会をやっている反天皇制運動連絡会というのは、まるで異星からやってきた奇妙なet集団のように見えるわけです。何のリアリティもない。さらにその外側では、〈ようこそ日本へ〉という化粧品メーカーによる国民美学的なキャンペーンの幟が並木道に林立している。そういう形で大規模な消費行動と暴力的な天皇主義集団が、そのまま混在できる空間がそこでは成立していました。

5月1日にはこの空間を引きずるようにほぼ同じ場所でフリーターメーデーが行なわれたわけですが、そこではきわめて理不尽な弾圧が待ちうけていた。サウンドデモ、トラックにDJたちが乗って音を出し、その周りで踊り狂うという運動なのですけれど、そのデモ許可が下りているのに、何の理由もなくDJを逮捕し車ごと持っていく。掲げていたアドバルーンも持っていく。その結果、4人が逮捕されるという事件が起きました。CRMのような、現在のイデオロギー諸装置に抵抗できるような街の身体や欲望を発明しようとするのがサウンドデモとしたら、それに対する暴圧、CRM的な動線管理からはみ出るものは容赦なく弾圧するぞという警察当局による宣言だったと思います。もちろんこれは共謀罪の予行演習でした。明らかにそういう弾圧態勢をとっている。より拡散的な市場化したイデオロギー装置とより排他的な国民国家の統合原理は、こういう形で交渉し節合している。今起きていることはそういうことで、アルチュセールが68年のただなかで行なった言説生産を今どういう形で生かせるのか、けっして生かせないことはないと思います。支配権力、それにも増して資本家たちは多くを学び、われわれもまたやるべきことが膨大にある、今僕はそういうふうを考えています。

というわけで、「アルチュセール 素人の読み方」を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

**崎山政毅（司会）** 今回の平井さんのお話は、国家のイデオロギー装置の質的な飛躍と、マクロなあるいはミクロな、様々なレベルでの展開と拡張という提起だったと思います。『再生産について』を今どう読むのかということに関するチャレンジングな内容に満ちた提起だったと思いますので、これも後ほど議論できたらいいなと思います。さしあたって事実確認に関する質問があればどうぞ。

**山田潤（フロア）** 「フォーディズム的妥協」というのがわからない。私は、フォーディズム



というのはもうちょっと古いものであって、68年に起こったことはフォーディズムに対する反抗みたいなものがあったのではないかと考えている。平井さんがおっしゃられている、68年以後「フォーディズム的妥協」があってその20年後にまたフォーディズムとは異なる試みが行なわれているという理解は、私が考えていたことと少し違う気がしました。

**平井玄** その通りです。周知のように、フォーディズムというのは1920年代のアメリカのフォード自動車の工場での生産管理システムをモデルとして、フランスを中心とするレギュラシオン学派が名づけたものです。ですから20年代の生産様式に淵源しているわけで、60年代の運動はそれに対する反抗だったというのは事実です。しかし、かなり長い射程をとって考えなければならぬのではないかと思うわけです。日本の経営、トヨタイズムに対して新しいフォーディズムなのか、それともポスト・フォーディズムと呼ぶべきなのか、レギュラシオン学派の中でも世界的に様々な議論がなされてきたわけですが、あえて省略しました。要するに企業体のなかで蓄積システムからはみ出ない限りで労働者の要求を呑み、その代わりに生産に奉仕させ市場としての消費者を創り出すという大雑把な理解で強いて通しました。ネグリとハートの示唆を受けたまさに「ど素人の読み方」ですが、しかし先進工業国の多くの企業は60年代の抵抗を吸収しながら、〈妥協〉の形をより洗練させていったおかげで、第三世界の運動による資源やコストの高騰、市場の喪失という危機をなんとか乗り切っていった。そういう意味でフォーディズムは80年代まで続いたのだと、僕は思います。

#### コメンテーター 省略

**平井玄** 今が戦時下であるという認識が必要だと思います。いつか戦争が来てもっと酷くなるというのではない。戦時下だからこそ驚くべきことが起きているわけで、それを押さえないと戸坂潤や中野重治がなぜわれわれの元に帰ってきているのか、全く理解できないだろうと思います。僕は今「蟹工船」を読んでいます。「太陽のない街」を読み、かつ中野重治を読んでいます。なぜそうなっているのか、そのことはよくわからないんじゃないかなと思うんですね。

アルチュセールは「上部構造への進駐」を私たちに提起した、というか私たちの行動とともに彼はそれを提起したわけですね。しかしながらそれから40年経って今必要なのは「下部構造への侵入すること」ではないのか。われわれは下部構造を忘れてしまったのか？ 資本主義は広告マーケティング産業化しているけれども、しかしながら下部構造は存在しているし、労働者は存在している、階級は存在している。そこが今重要なのではないかと思います。「アルチュセールとは逆にアルチュセールに」。つまりアルチュセールと逆の道を歩むことが、今アルチュセールを生かす道だというふうに僕は思います。

僕は、68年世代が嫌がる「階級」とか「プロレタリアート」という言葉を口にしているわけですが、そうしなければ議論は限りなく心理主義化し悪しき意味での社会学化する。最悪の形の社会学イデオロギーが言論を覆っている。それは広告マーケティング産業化と全く同じ事態だと思います。そのときに重要なのは、けっして工場労働者になりましょうという話ではありません。68年のエリートたちが、私は自分の場所にこだわったからやらなかったんですが、多

くの人たちが入っていききました京浜工業地帯，南大阪，釜が崎，山谷へ。あるいはさまざまな中小工場へ入っていききました。同じことをしようというのではなくて，すでに大学院生であること，すでに非常勤講師であること，教職待ちであることは，そのまま非正規労働者なわけで，そこからどんな闘いの形を発明できるのか。「やりたいことをやるだけさ」というスローガンは，その最大限の振幅でまだ生きていると思います。このままネオリベ化が進めば，皆さんの未来はない。このすばらしい希望のなさ。この認識がないと，アルチュセールを生かし，中野重治を生かし，というリアリティがもうひとつ感じられないんじゃないかなというのが，全体のコメントを聞いた僕の印象でした。